

七十八回目の終戦の日、戦争の記憶は年々薄れていくように思えます。世紀は変わっても、暑い夏、八月十五日の記憶は忘れてほしくありません。大切な家族、父を、兄弟を、子どもを戦争で亡くされた方々の心の痛みは時が流れても消えることはないでしょう。命の尊さ、平和の大切さを皆様の体験から考えてみましょう。

風化しないために  
時が流れても



平成十三年八月十五日の公民館だよりに掲載された記事を再掲載

残された家族

上新田町 女性

昭和十八年榛東村から嫁いで来た私は二十四歳。翌年、産まれたばかりの息子と姑を私に託して、夫は戦地に赴き、二十一年に戦死しました。

結婚生活というには、あまりに短い年月でした。すべてが私の肩にかかり、空襲で焼け残った狭い家に、大勢が集まって暮らすのすさまじさ・・・泣いて放り出すこともできず、一人で頑張るしかなかった。

悲惨な戦争と苦難の多かったことは、忘れられませんが生きていればこそ楽しめた湯治や日本舞踊は、私の人生の中で明るい思い出として今の平和を実感しています。



働きづめの母

古市町 女性

父は私が四歳の時、戦地で病気により亡くなりました。大変子煩悩であったときいていま

す。私は、赤ちゃんの頃身体が弱くカゼや肺炎になり易く、母が私にかかりっきりの時、家事は父がやってくれたそうです。父の顔は写真でしか思い出すことはできません。二十七歳で未亡人となった母は、孫が生まれるまで働きどしどしでした。子どもの頃、夜遅くまで働く母をひとり待っていました。高校時代は母を少しでも助けようとアルバイトをいくつもしました。その母も平成五年に亡くなりました。母子で一生懸命生きてきました。戦争は、二度とあつてはいけないことです。

五十六年経っても

大根町 男性

昭和十九年十月に十五歳で東京陸軍少年飛行兵学校に入校しました。午前中は一般教育、午後は軍事訓練、夜は補習や反省と大変厳しい毎日でしたが慣れるに従い余裕も出てきて充実した日々でした。

ここを卒業し操縦に進んだ先輩たちは、やがて知覧航空隊に配属され帰らぬ人となりました。

翌年の八月十五日、全員が集合させられ、良く聞き取れない玉音放送を聞いた時は、くやしきでいっぱいでした。このように軍国主義のなかで少年時代を送った私には「定時定点の必達の心」(決まった時間に決まった所へ必ず到達すること)が身に付き、社会人になつてからも「約束したことは万難を排して守る」ようにしています。

五十六年前の惨劇で尊い命を落とされた方々のご冥福を祈るとともに、詠み人不明ではあるが、あの頃の悲しい辞世が今でも心から離れないのです。

君がため 何か惜しまん  
若桜 散つて甲斐ある  
いのち なりせば



垂直に沈む母艦

稲荷新田町 男性

昭和十七年五月一日二時水上機母艦瑞穂でニューギニアに向け出港したが、夜十一時頃敵の潜水艦の砲弾を受けてしまった。傾きつ



つある船の上甲板に立ち、生きて帰れないと思つたら頭の中に浮かんだのは両親だけ。「材木を投げろ！」の聲に夢中で投げ、船から海へ飛び込み木にしがみついた。「みんなまとまってるいろ」「寝ると死ぬぞ、軍歌を歌え」。

皆で励まし合い、五時間位かな、ボーと汽笛が聞こえてきた時は命がある、助かったと思つたね。もつと苦しいことたくさんあるが言えない。戦争は絶対にやつてはいけない。

命をつないで  
くれたもの



平成十五年八月十五日の公民館だよりに掲載された記事を再掲載

かんそう芋のおじや

新前橋町 男性

昭和十九年、十九歳の私は、特別幹部候補生として入隊。九州に配属され、飛行機ごと突撃する訓練をしていた。終戦は、鳥取の「空542部隊」で迎えた。

食事は特別で、白米、魚、肉、羊かんも口に入った。鳥取では、ナシやモモなども十分に食べられた。ところが終戦で戻ってきた途端食糧難だった。仕方なく配給で持ち帰った航空糧食や、飛行服と交換に食糧などを手に入れた。

現在の「新進」が籠島商店といっていたころ、ここでギョウザのような形をしている生麩(しよふ)を手に入れ、砂糖につけたり、すいとんにして食べたがおいしかった。また、乾燥のさつま芋を入れたおじやは、二度と食べたくないまじいものでした。

今、生きていること、食の豊かさを有り難く感じます。



汁ばかりのすいとん

大根町 男性

戦時中、私は境町に住んでいました。当時、米は配給で、無論足りるはずもなく、近所の農家に米や野菜を分けてもらっていました。米の代わりに、里芋やさつま芋、大豆、じゃが芋、とうもろこし、とにかく何でも食べました。米粒が数えられるほどしか入っていない雑炊や、汁ばかりのすいとんや小麦粉にぬかを混ぜたものを食べたこともありました。

昭和十八年の暮れに、学校を繰り上げて卒業となり、その後、太田の工場に勤務しました。その工場では、残業をすると夕飯がでたので、弟や妹たちのために出来るだけ残業したことを覚えています。

戦争が終わっても食糧事情はしばらく困難が続き、よく生きてこられたと思います。あんな思いは、もう二度としたくありません。



大豆油のしぼりカス

川曲町 女性

東京大空襲のとき、私たち家族は東京蒲田に住んでいた。次第に食糧難となり技術者の父が作った簡単なパン焼器で焼いたパンや大豆油のしぼりカスの豆を米といっしょに炊いて食べたりしていた。迫る危険を避けて太田市の親戚を頼って疎開。

七歳から五年間を過ごした。近くの農家から牛馬にやるよりはと、芋などを子守の駄賃の代わりにいただき食卓にのぼった。近くで葬式があると、まかれた小銭を拾って駄菓子屋に行くと、飴やビスケットが買えた。甘い物のない時代のおいしかった記憶は鮮明に残る。

